

耐震診断チェックリスト (S 造用)

施設名		階数 / 延床	階 / m <sup>2</sup>
竣工年	昭和 年	診断者	* 1
準拠した基準			

分類	項目	内容	概要書 P	備考
現地調査	1 図面と状況の照合結果	スリット照合 用途照合 壁等照合 特記：	・ 相違無し ・ 相違有り ・ 相違無し ・ 相違有り ・ 相違無し ・ 相違有り	* 2 * 3
	2 実態調査 * 4	調査結果の図示	・ 有り ・ 無し	
	3 コンクリート強度	設計強度 ( ) N/mm <sup>2</sup>		
	4 不同沈下	不同沈下の有無	・ 無し ・ 有り	
計算の前提	1 図面等の資料の有無	平面図 立面図 断面図 軸組図 各階伏図 基礎伏図 杭伏図 配筋図 部材リスト 鉄骨詳細図 ポーリングデータ 基礎形式 ( )		
	2 荷重	最深積雪量 ( ) cm 防水押えコンクリート その他特殊荷重	・ 無し ・ 有り ( ) kN/m <sup>2</sup> ・ 無し ・ 有り ( )	
	3 入力材料強度	コンクリート F <sub>c</sub> = ( ) N/mm <sup>2</sup> 鉄筋 ・ SR24 ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ SD30 ( ) N/mm <sup>2</sup> 鉄骨 ・ SS41 ( ) N/mm <sup>2</sup> ボルト ・ F8T ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ F9T ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ その他 ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ SD35 ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ F10T ( ) N/mm <sup>2</sup> ・ F11T ( ) N/mm <sup>2</sup>		
	4 柱軸力	柱軸力 N のとりかた ・ メカニズム時	・ Yes ・ No	
	5 剛床仮定の成立	・ 成立	・ 不成立 * 5	
判定	1 加力方向	・ 片方向	・ 両方向	
	2 長期積雪荷重に対して	・ 検討した	・ 検討しない	
	3 判定表			* 6

施設名

---

## 耐震診断報告書

平成 年 月

担当事務所名

---

施設名

---

## 耐震診断概要書

平成 年 月

担当事務所名

---

# 目 次

	ページ
§ 1 建物概要	P. ~ P.
1 - 1 建物名称等	P.
1 - 2 被災経験等	P.
§ 2 耐震診断の方針	P. ~ P.
2 - 1 診断準拠基準	P.
2 - 2 使用プログラム等	P.
2 - 3 診断実施者	P.
§ 3 仮定条件	P. ~ P.
3 - 1 骨組のモデル化	P.
3 - 2 建物重量	P.
3 - 3 材料強度	P.
§ 4 現地調査	P. ~ P.
4 - 1 現地調査結果の概要	P.
4 - 2 実態調査用紙	P.
4 - 3 超音波探傷試験結果	P.
4 - 4 不同沈下量の測定	P.
( 4 - 5 柱の傾斜量測定 )	P.
§ 5 解析用建物図面	P. ~ P.
5 - 1 施設台帳	P.
5 - 2 平面図・立面図	P.
5 - 3 各階伏図	P.
5 - 4 軸組図	P.
5 - 5 断面リスト	P.
5 - 6 鉄骨詳細図	P.
5 - 7 基礎詳細図	P.
§ 6 診断概要	P. ~ P.
6 - 1 要素耐力表	P.
6 - 2 崩壊モード図	P.
§ 7 診断結果	P. ~ P.
7 - 1 診断結果	P.
7 - 2 考 察	P.
§ 8 補強案	P. ~ P.

## § 1 建物概要

### 1-1 建物名称等

建物名								
所在地								
建物用途								
設計年	昭和		年					
竣工年	昭和		年					
構造種別	* 7							
規模	階数	地上	階	地下	階	PH	階	
	面積	建築面積						m <sup>2</sup>
		延床面積						m <sup>2</sup>
		診断面積						m <sup>2</sup>
	高さ	軒高さ						m
最高高さ							m	

### 1-2 被害経験等

被害経験	* 8
改修履歴	* 9

## § 2 耐震診断の方針

### 2-1 診断準拠基準

診断準拠基準	
判定基準	Is Iso かつ、 q 1.0 の場合「倒壊、又は崩壊する危険性が低い」 原則として補強の必要は無い 但し、局所的な地形等による地震入力の増幅や脆性的崩壊モードが 予想される場合などは、適切な耐震性能の補強を図る。

### 2-2 使用プログラム等

プログラム名	* 10	* 11
作成者	* 12	

### 2-3 診断実施者

診断者			
資格	一級建築士	第	号

### § 3 仮定条件

#### 3-1 骨組のモデル化

\* 1 3

#### 3-2 建物重量

階	Wi (kN)	Wi (kN)	各階床面積 (m <sup>2</sup> )	単位重量 (kN/m <sup>2</sup> )
3				
2				
1				

#### 3-3 材料強度 \* 1 9

材 料		種 別	材料強度	診断時採用強度
鋼 材			N/mm <sup>2</sup>	N/mm <sup>2</sup>
接合ボルト			N/mm <sup>2</sup>	N/mm <sup>2</sup>
アンカーボルト			N/mm <sup>2</sup>	N/mm <sup>2</sup>
鉄 筋	主 筋		N/mm <sup>2</sup>	N/mm <sup>2</sup>
	帯 筋			
	壁 筋			
コンクリート			N/mm <sup>2</sup>	



実 態 調 査 用 紙

調 査 箇 所	
設 計 図 書	
調 査 結 果	



4 - 3 超音波探傷試験結果

4 - 4 不同沈下量の測定

( 4 - 5 柱の傾斜量測定 )

## § 5 解析用建物図面

5 - 1 施設台帳

5 - 2 平面図・立面図

5 - 3 各階伏図

5 - 4 軸組図

5 - 5 断面リスト

5 - 6 鉄骨詳細図

5 - 7 基礎詳細図

## § 6 診断概要

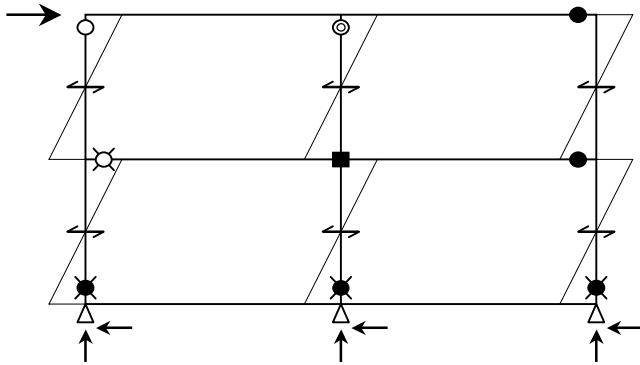
### 6-1 要素耐力表

部 材	部材寸法	最低の値の部位	最低の耐力		備 考	
大 梁	端 部 H- × × ×	仕 口	Me = kN・m		(溶接)	
		継 手	Mj = kN・m		(ボルト)	
		母 材	Mm = kN・m		注)イ	
	中央接合部 H- × × ×	仕 口	Me = kN・m			
		継 手	Mj = kN・m			
		母 材	Mm = kN・m		注)イ	
柱	柱 頭 H- × × ×	母 材	Mm = kN・m		注)イ	
		パネルゾーン	Mp = kN・m		(アンカーボルト)	
		継 手	Mj = kN・m			
	柱 脚 H- × × ×	母 材	Mm = kN・m		注)イ	
		柱脚(曲 げ)	Mb = kN・m		(アンカーボルト)	
		柱脚(せん断)	Qb = kN		(アンカーボルト)	
筋 違	L- × ×	母 材	Nm = kN			
		接合部	ファスナー	Nf = kN	Pj = kN	(ボルト)
			溶接	Na = kN		注)ロ
			G・P L	Ng = kN		注)ロ
			はしあき	Np = kN		
桁 梁 (筋違いに 取付く梁)	H- × × ×	母 材	Nm = kN			
		接合部	ファスナー	Nf = kN	Pj = kN	(ボルト)
			溶接	Na = kN		
			G・P L	Ng = kN		
			はしあき	Np = kN		
基 礎		基礎回転モーメント	Mf = kN・m			
基 礎 梁		基礎梁モーメント	Mg = kN・m			

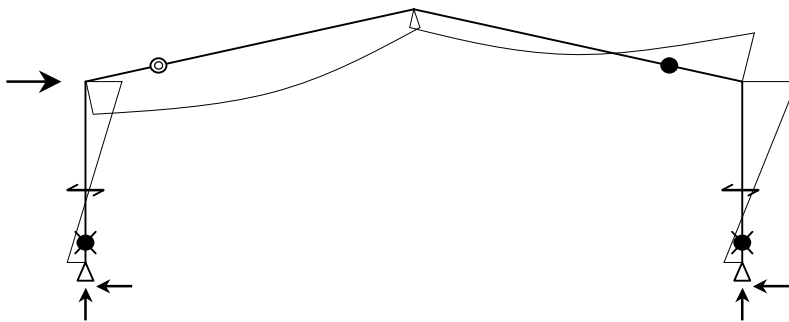
1. 各部材の耐力は、部材毎に記入する事。
2. 注)イ 部材にテーパが付いた場合、分割してその部分の耐力を記入する事。
3. 注)ロ 丸鋼筋違いの場合は、軸部プレートと柱・梁に取付くプレートの2ヶ所を記入の事。

[ 凡例 ]

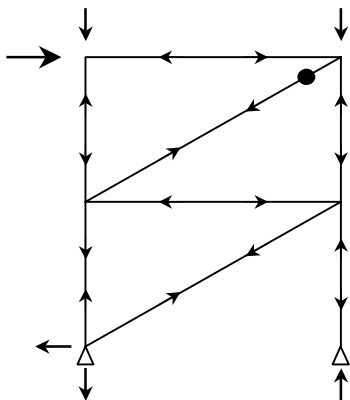
A . ラーメン方向 ( 事務所・校舎等 )



B . ラーメン方向 ( 屋内運動場等 )



C . ブレース方向



- : パネージンで決まった場合
- ⊗ : 仕口で決まった場合
- ◎ : 母材で決まった場合
- : 継手で決まった場合
- ⊗ : アンカボルトで決まった場合

## § 7 診断結果

### 7-1 診断結果

$$E_o = \frac{Q_u \cdot F}{W_i \cdot A_i} \quad , \quad I_s = \frac{E_o}{F_{es} \cdot Z \cdot R_t} \quad , \quad q = \frac{Q_u}{0.25 \cdot F_{es} \cdot W_i \cdot A_i \cdot Z \cdot R_t}$$

X方向( 桁行方向 )								
階	I so	Qu	F	F es	E o	I s	q	判定
3								
2								
1								

Y方向( 張間方向 )								
階	I so	Qu	F	F es	E o	I s	q	判定
3								
2								
1								

### 7-2 考 察 \* 1 6

## § 8 補強案

## 各項目の説明

- \* 1 実際診断を行った設計者（判定委員会で説明のできる人）の名前を記入する。
- \* 2 概要書の該当するページを記入する。
- \* 3 書き切れない場合は別紙とし、ページを記入する。
- \* 4 各階、各部材毎に調査し、結果を報告書に記入する。
- \* 5 剛床が成立しない場合、下記の方法で記入する。  
(例1) 各フレーム毎に計算する。  
(例2) 現状では成立していないが、水平ブレースの補強を前提として全体で計算する。  
(ただし、水平ブレースの補強が可能である場合)
- \* 6 「7-1 診断結果」「7-2 考察」を添付する。
- \* 7 屋内運動場で、鉄筋コンクリート造と鉄骨造と併用した建物の場合、両方を明記する。  
(例) RC造(基礎～2F床)、S造(2F床～RF)
- \* 8 地震の被害を受けていなくても経験を記入する。
- \* 9 構造はもとより、仕上・設備等の改修履歴も記入する。
- \* 10 一貫計算、保有耐力、耐震診断、変形法等使用したプログラム名を記入する。
- \* 11 \* 10 に記入したプログラムの使用目的(架構認識、荷重拾い、耐震診断等)を記入する。
- \* 12 プログラムを作成したメーカー名(個人が作成した場合は個人名)を記入する。
- \* 13 計算する上で仮定した条件等を記入する。  
1) 水平ブレースによる剛床仮定が成立しなかった場合、どのように考えたか記入する。  
2) 特殊な問題点、モデル化等について略図等で説明する。  
3) 書き切れない場合、別紙で説明する。
- \* 14 実態調査には、少なくとも下記内容を調査し記入のこと。  
1) 鉄骨柱脚のディテール  
2) 柱・梁取合部(パネルゾーン)の納まり(パネルゾーン部のPL厚、溶接方法及びサイズ等)  
3) 柱・梁の継手部及びブレース端部の納まり。  
4) 山形ラーメン架構の棟の納まり。
- \* 15 崩壊モード図は全フレームについて凡例の如く、どの部位で決定されたか数値を記入して図示する。
- \* 16 考察を記入するに当たり、診断した建物の性状を分かり易く説明する。  
(勿論、外観調査、モデル化等の仮定条件を踏まえた上で考察する。)